

高等専門学校出身学生の適応に関する予備的研究

—学生相談に来談した事例から—

A Preliminary Study about the Adaptation of the University Students
Who Entered from Technical Colleges

相澤直子*
Naoko AIZAWA

尾崎啓子**
Keiko OZAKI

はじめに

筆者らは複数の大学における学生相談カウンセラーとしての経験の中で、他大学や高等専門学校（以下、高専と記す）出身の学生（両方合わせて他校出身学生）の訴えには独特の印象があると感じてきた。実数としてはさほど多くないにもかかわらず、彼らとの相談は記憶に残っている。

しかし、他校出身学生の実態や、彼らへの適応支援に関する調査・報告はきわめて少ない。

そこで、彼らの新たな環境への適応状況や自己認識、支援ニーズを把握することは、その存在や困っていることに気付かれにくい、様々な“マイノリティ”学生への支援にもつながると考え、筆者らは、他校出身学生の実態把握と支援のための仮説生成を目的とした研究を開始した。

相澤・尾崎（2017a）では最初の予備的研究として、A大学の学生相談部署（年間約400人超が来談）に於いて、X～X+10年度までに、筆者らが主担当としてカウンセリングした319事例（他のカウンセラーが不在の時に臨時的に対応したものや、インテークのみで他のカウンセラーに引き継いだものは除く）の内、他校出身学生の49事例（担当事例の15.4%）を分析対象とした。再受験して学部1年生として入学したものや、日本の学校を経由している外国籍のものは除いている。なお当時筆者らは、二人合わせて週2.5日、A大学に非常勤カウンセラーとして勤務していた。

A大学は、学生総数約10,000人の、首都圏にある理系中心の大学・大学院である。学部生と大学院生はほぼ半々で、若干大学院生の方が多い。女子は学生全体の約14%である。学部生の9割は大学院に進学し、ハイレベルな研究機関として留学生や研究員の受け入れも盛んである。他校出身学生の人数は非公表だが、例年3年次編入定員30人（学年の約3%）および修士課程入学者約1,600人の内3割が、国内の他校出身と推計される。

そのA大学で筆者らがカウンセリングした他校出身学生の49事例を対象として、①性別、②初回時学年、③

初回来談月、④出身校、⑤居住形態、⑥来談経路、⑦相談期間、⑧相談回数、⑨転帰、⑩学内外とのコンサルテーションの有無、⑪入学理由、⑫相談内容、⑬主訴（相談申込票に記入された文章または初回の訴えの内容からキーワードを抽出）、の13項目について分析を行った。

その結果、A大学の来談学生全般と共通する部分もあったが、他校出身学生的事例には、『切実感・切迫感の強さ』と『教員の関与の少なさ』、『性急に解決を期待するため相談が中断しやすい傾向』、『来談時にほぼ全員が何らかの抑うつ状態にあること』等の特徴が見られることが示唆された。

さらに、他校出身と言っても、学部編入生と院からの入学者とは区別して検討する必要があるかもしれない、同様の観点からの内部進学生との比較や、学部（文系か理系か）による異同についても、今後を検証すべき課題と考えられた。

目的

本稿は、本研究に向けた課題整理のための予備的研究その2として位置付けている。上述の相澤・尾崎（2017a）と同様に、A大学に於いて筆者らが担当した事例のうち、特に高専出身学生的事例に焦点をあてて、事例の様相をより丁寧に点検し、高専出身学生の特徴、および学部編入生と院からの入学生（以下、院入生）との相違についての検討を試みる。

方法

相澤・尾崎（2017a）では、院入生に分類していた、高専卒業後に他大学を経て院からA大学に入学した事例（以下、他大経路生）と、分析後に来談した事例等も加え、筆者らが担当した全ての高専出身学生（留学生を除く）を対象とした。

分析項目は、相澤・尾崎（2017a）と同様に、①性別、②初回時学年、③初回来談月、④出身校、⑤居住形態、⑥来談経路、⑦相談期間、⑧相談回数、⑨転帰、⑩学内外とのコンサルテーションの有無、⑪入学理由、⑫相談内容、⑬主訴（相談申込票に記入された文章また

* 東京工業大学学生支援センター／埼玉大学教育学部附属教育実践総合センター研究員

** 埼玉大学教育学部附属教育実践総合センター

は初回の訴えの内容からキーワードを抽出)、の13項目とした。さらに、代表的な事例の概要を記述した。

結果

対象となった事例は9人であった。表1は、各事例の分析項目を一覧表にしたものである。

9人の内訳は、全て男子で、編入生・院入生・他大経由生ともに、3人ずつであった。なお、期間・回数・転帰は、事例の集約をしたX+10年度時点のもので、現在はいずれの事例も終結している。

初回時の学年は、学部3年1人、学部4年2人、修士1年4人、修士2年1人、博士1人であった。学部3年で来談したE男は、2年次への編入であるので、編入・入学した最初の年に来談した者は修士1年の4人ということになり、2年目以降に来談した者と半々であった。

初回来談月は、4月1人、5月2人、7月1人、8月1人、9月1人、1月3人で、年度初め・夏休み頃・年明けに3分された。

居住形態では、家族・親族と同居が3人に対し、独居が6人であった。高専時代は、自宅又は寮で生活していたはずなので、A大学に入って初めて独居となった者は、自立的生活の確立にも苦勞を伴うことが推察される。

来談経路については、他者に勧められて来談した者3人に対し、自発来談が6人であった。これは、相澤・尾崎(2017a)の他校出身学生全体と同じく、新たな環境の中で、自発的自主的に動かないことには何も始まらない状況が反映されていると思われる。また、教員の勧めによる来談は1人だけで、こちらも他校出身学生と同様に、教員との関係性が希薄であったり、うまくいっていなかったり、もしくは、教員の目には彼らが困っているようには映らないという可能性が考えられる。

連携先の有無(当該学生に関して教職員や保護者とコンサルテーションを行ったかどうか)については、6人が連携無しであった。これも他校出身学生全体と同様で、コンサルテーションが少ないことが示された。また、連携有りの内、教員とは1人、保護者とは0人の一方、学内医師との連携は2人であった。2人とも、自発的に最初に医師のもとへ相談に行き、その後に医師からカウンセリングにリファーされたものである。

上述の自発来談が多いことと合わせて、何か困ったことがあっても、高専出身学生にとって大学教員は敷居が高く、親にも頼りにくい様子がうかがえた。むしろ彼らにとっては、相談窓口として明示されている学内のカウンセラーや医師の方が、安心して相談しやすい相手なのかもしれない。

入学の理由や動機については、「不明」4人、「専門性を高めたい」4人、「別の専門分野を学びたくて」1人であった。これも他校出身学生全体と同様で、自身の向上・ステップアップのために、専門性を深め、そのうえでより良い就職や研究を目指したいと、明確な目的意識を持って編入・入学してくる者が半数いた。

相談内容については、進路・修学が7人と大多数を占め、他には心理・性格と対人関係が1人ずつであった。また、来談のきっかけは複合的だが、4人が「研究のつまずき」をあげ、次いで「心身の不調」と「就職活動」が2人ずつ、「学外の対人関係」が1人であった。内容ときっかけを合わせて、自身の能力不足・劣等感を痛感したことや研究室への不適応によって、研究や就活が難航している状況がうかがわれ、これも他校出身学生全体と同様であった。

初回来談時の状態像についても他校出身学生全体と同じく、ほぼ全員が抑うつ指標とされるような精神症状を訴えた。「集中力の低下」や「情緒不安定」は半数に認められ、さらに「身体症状」や「不登校」、「対人関係の不調」等、日常生活や行動面に支障が出ている者も少なくなく、抑うつ状態に陥っての来談であることがうかがわれた。

一方、来談目的は、他校出身学生全体とは異なり、「漠然とした期待・願望」が3人で、次いで「具体的な解決方法を知りたい」2人、「進路の検討」2人、「医療の必要性があるか聞きたい」1人、「能動的な自己変容」1人であった。他校出身学生全体では「能動的な自己変容」が最も多く、初回から目的が明確化し、自力解決志向が強く、来談の目的に切実感・切迫感が感じられた。それに比べると高専出身学生は、行き詰って自発的に来談したものの、その目的はやや曖昧で、中には「話し相手がほしかった」という者もあり、「甘えん坊」とでも言うような対人指向性が見受けられた。

さらに、相談期間・回数・転帰も、他校出身学生全体とは異なっていた。表2は、表1から、高専出身学生に特徴的と思われる相談期間・回数・転帰の3項目を抜粋したものである。加えて、最右欄に、面接中に語られた他者との関係性や、筆者らカウンセラーに対する態度から感じられる彼らの対人関係性(彼らから“受ける印象”)を3段階で評定した。

他校出身学生全体の事例では相談が中断しやすく、かなり短い期間や回数で終了するものや、単発相談も少なくなかったのに対して、表2に示した通り、高専出身学生では中断は1件もなかった。また、9人中7人が、断続的であっても4ヶ月ないしは11回以上継続していた。そして、彼らの対人関係性ないし“受ける印象”は、良好(○)6人、概ね良好(△)2人、不良(×)1人であった。ただし不良と評定されたC男も、カウンセラーとの関係は決して悪くなく、家族や周囲の他者との関係がうまくいっていないということであった。

表1 高専出身学生の事例一覧

ID	①性別	②学年	③初回	④編／院／他	⑤居住形態	⑥経路	⑦期間	⑧回数	⑨転帰	⑩連携先	⑪入学理由	⑫相談内容	⑬主訴			対人関係
													きっかけ	状態像	目的	
B男	男	B4	9月	編	独居	自発	13M	16	オープン エンド	教員	不明	進路・修学	研究の つまずき	研究の 自信喪失、 集中力低下	能動的な 自己変容	○
C男	男	M1	1月	院	家族・ 親戚と 同居	自発	4M+ 卒業後 フォロー 2回	8	終結	無	専門分野 を変えて	進路・修学	就活	研究の 自信喪失、 不安・葛藤、 対人関係の 不調	進路の 検討	×
D男	男	M2	4月	他	家族・ 親戚と 同居	医師 からの 紹介	10M	7	終結	医師	専門性を 高めたい	対人関係	学外の 人間関係	身体症状、 情緒不安定	漠然とした 期待・願望	○
E男	男	B3 (休学 あり)	1月	編	家族・ 親戚と 同居	自発	12M～	継続中	継続中	無	専門性を 高めたい	進路・修学	健康状態	抑うつ、 研究の 自信喪失、 情緒不安定、 対人緊張、 集中力低下、 不登校、 対人関係の 不調	進路の 検討	△
F男	男	B4	1月	編	独居	自発	2M	5	終結	無	不明	心理・性格	就活	意欲低下、 抑うつ、 集中力低下	医療の 必要性	○
G男	男	M1	5月	院	独居	自発	12M～	継続中	中断後 再来し 継続中	医師	不明	進路・修学	研究の つまずき、 研究室の 人間関係	意欲低下、 情緒不安定	漠然とした 期待・願望	○
H男	男	M1	8月	院	独居	自発	7M	3	オープン エンド	無	専門性を 高めたい	進路・修学	研究の つまずき	身体症状、 抑うつ、 集中力低下	漠然とした 期待・願望	△
I男	男	D	7月	他	独居	教員の 勧め	3M	5	終結	無	専門性を 高めたい	進路・修学	健康状態、 学生生活 上の問題	身体症状	具体的な 方法	○
J男	男	M1	5月	他	独居	友人の 勧め	12M	19	終結	無	不明	進路・修学	学外の 人間関係、 研究の つまずき	情緒不安定、 集中力低下	具体的な 方法、 話し相手が ほしい	○

表2 高専出身学生に特徴的な項目

ID	⑦期間	⑧回数	⑨転帰	対人関係性
B男	13M [*]	16	オープンエンド	○
C男	4M+卒業後フォロー2回	8	終結	×
D男	10M	7	終結	○
E男	12M～	継続中	継続中	△
F男	2M	5	終結	○
G男	12M～	継続中	再来し 継続中	○
H男	7M	3	オープンエンド	△
I男	3M	5	終結	○
J男	12M	19	終結	○

※Mは月数

事例

以下に、学部編入生・院入生・他大経由生それぞれの代表的事例を示す。なお、事例はプライバシー保護のために加工している。

〔編入生の事例〕

B男は高専を卒業後、学部3年に編入した。4年になって、研究室滞在時間が長い研究室に所属した。卒論研究が本格化した4年次後期に、「研究のスピードについていけず、どんどん詰まって手がつけられなくなってきた」と自発来談し、しばらくはほぼ毎週継続的に面接をした。

なんとか卒論を仕上げ、学部を卒業。既に大学院の同じ研究室への進学が決まっていたが、卒論以上のハードワークが求められることが明らかであり、研究室変更も検討した。悩んだ末に、「このまますぐに修論研究に移行したら、自分が壊れてしまうかもしれない。とにかく一旦春休みをもらって、自分をリセットしたい。指導教員には自分で話してみるが、カウンセラーからも一筆書いてほしい。」と言い、カウンセラーからの意見書を持って自分で指導教員らと交渉し、B男のペースでの学修や研究テーマの変更を承認してもらうことができた。

大学院進学後、指導教員とはB男自身で連絡を取りつつも、しばらくは講義に出席するだけで研究室には

行かず、6月になってようやく研究とゼミ出席を再開した。カウンセラーは、スタートの出遅れが研究の進捗や研究室内での人間関係に影響しないか心配していたが、じきに落ち着いたようで、修士1年の後期からはほとんど来談しなくなった。その後修士卒業の直前に、「あるとき休むことを容認してもらえたので、頑張りきれた。」と、挨拶の電話があった。(全16回)

〔院入生の事例〕

C男は、高専専攻科を卒業後、以前から興味があった理学分野を学びたくて、高専とは専門を変えて大学院に入学した。

修士1年の冬、就活スタートの時期に、「進路・就活についていろいろ悩む。親子関係が良くなく、親には相談したくない。」と自発来談した。研究のレベルについていけなくなっていたこともあり、専門とは無関係だが、アルバイト経験がある対人援助職分野で就職活動を展開した。なかなか内定が得られず苦労したが、結果的には希望していたところに就職が決まり、カウンセリングは一旦終了した。

指導教員の親身な指導のおかげで修論を仕上げられたようだが、卒業後に、「上司が厳しくて辛い。少しだけ話を聴いてほしい。」という電話が2回程あった。(全8回)

〔他大経由生の事例〕

D男は、高専卒業後、一旦他大学に編入した。他大学の学部を卒業後、大学院からA大学に入学した。

修士2年の前期末、「研究・期末試験・就活が重なって、彼女と会う時間が全く取れず、すれ違いから彼女と喧嘩別れしてしまったが、後悔や自己否定感から眠れない。」と、学内保健センターの内科を受診し、内科医に勧められて来談した。

当初は語りながら落涙していたが、失恋に伴う悲痛な気持ちは、3～4回ほどで整理され一旦終了した。しかし、晩秋から、息抜きと自己の振り返りにカウンセリングを利用したいと言って再来した。以降月1回のペースで修士卒業まで定期面接を行った。超多忙で、成果主義の研究室で、厭味・皮肉のみならず罵声・怒声で指導されることもあるようだった。それに対しては、持ち前のユーモアと聡明さで軽妙に受け流し、研究室以外の友人関係で気分転換を図って対処した。修論提出後も3月末まで実験をするようにという要望もこなした。修士卒業後は、彼の人物性を高く評価してくれた大手メーカーに就職し、卒業後1年ぐらい経った頃に、「リクルーターとして来学したので」と、カウンセラーのところへも挨拶に来た。(全7回)

考察

1. 高専出身学生の不適応の様相

(1) 学部編入生と院入生の相違

対象事例数が少ないので断言はできないが、筆者らのカウンセリングに訪れた高専出身学生に於いては、学部編入生と院入生・他大経由生との間に特段の相違は見出されなかった。

もちろん、高専で修得した単位や専門の内容が、新たな大学での学修にどの程度活かされるかによっては、スタート時点での苦労の度合いは異なるであろう。特に、学部編入生では、高専時代に取得した単位が、そのまま新しい大学での単位として認定されるかどうかで、編入後の必修単位数が大きく変わり、場合によっては既定の期間内には取りきれないカリキュラムになっていたり、2年次からの編入として扱われたりすることもあると聞く。

それでもA大学に於いては、編入生も院入生も、各人の努力によって不足の単位や知識を補って、講義には順応できているようで、学部編入・院入学してすぐに、「授業についていけない」と訴えて来談した事例はなかった。

高専関係者の話では、他大学への進学を希望する高専生は、高専の中でもきわめて真面目で優秀で努力家であり、入試を突破するために自学自習する構えが身につけているそうである。また、高専生は経済的に余裕がない者が少なくないそうで、親に負担をかけられない・留年して奨学金が得られなくなると、学業の継続そのものが厳しいといった理由からも、たとえ科目数が非常に多かったり、アルバイトも外せなかったり

しても、寝る時間を削って必死に取り組むようである。受験に合格して以降はあまり勉強せず、進路についても「皆行くから」と漫然と大学院に進学する者も少なくない内部生とは、気合・覚悟が違うと言えよう。実際、「高専時代と同じように勉強しているだけだが、講義の成績は良い」と言っている高専出身学生は少なくない。

しかしながら、研究室所属を契機に、研究レベルの高さ、進路決定の同時並行の困難さ、人間関係の閉塞感、多忙等のいくつもの要因が重なり合って、心身共に消耗し、あらゆることを独力で乗り越えることが難しくなっていくものと考えられる。

(2) 他校出身学生全体との共通点

相澤・尾崎(2017a)では、他校出身学生的事例には、『切実感・切迫感の強さ』『教員の関与の少なさ』『性急に解決を期待するため相談が中断しやすい傾向』『来談時にほぼ全員が何らかの抑うつ状態にある』等の特徴があることが見出されたが、高専出身学生にも概ね同様の傾向が認められた。

高専出身学生も、専門性を高めたくてA大学に編入または大学院に入学しており、学業に対する目的意識や真剣さが内部生と異なる。それにもかかわらず、研究についていけなくなり劣等感と挫折感を味わうことは、彼らの自尊心を甚だしく傷つけるであろう。

それゆえ、来談時の彼らは、大なり小なり抑うつ状態を呈していた。

彼らには時間がない。学部編入後または修士課程のわずか2年間で、新しい環境になじみ、研究に必要な基礎知識を修得し、じきに就活もしなくてはならない。否応なく時間に追われて余裕がなく、一つつまずくとすぐにのっぴきならない状況に追い込まれるであろうことが想像される。

なにより、彼らには人的サポート資源が少ない。新しい研究室の教員やメンバーには引け目があって、信頼関係が築きにくい。しかし、研究室以外に、サークル等の居場所や仲間関係はない。以前からの友人・恋人とも疎遠になってしまうこともある。さらには、経済的に負担をかけているという負い目や、期待を裏切りたくないという思いから、行き詰まっても親にも相談しづらいということもあるようだ。

表1と事例に記述したが、B男の事例では、面接経過中に本人に頼まれて指導教員に宛てて、本人の状態を説明する手紙を書いた。が、他の事例では、教員や保護者とは連絡も直接的なコンサルテーションもしていない。

コンサルテーションが少ないことは、他校出身学生全体と共通した傾向であるが、カウンセラーが教職員間で周知されており、学生のことで教職員と連絡し合うことの多いA大学に於いては、コンサルテーションが少ないのは、他校出身学生や高専出身学生的事例の一つの特徴であると言えよう。

教員の関与が少ない理由としては、いくつかのことが考えられるであろう。教員には、入試の基準をクリアし、

自発的意欲的に入学してきた彼らは、有能で有望な学生に見えるのかもしれない。実際、一般的には高専出身学生に対して大学教員は、「よく勉強する」「基礎知識や実験・作業に関するスキルが高い」等、勤勉性や技術力を高く評価しているようである。年齢的にも、学部1年生と違って成人しており、覚悟をもって入ってきたからには、自分のことは自分で何とかすべきだというような考えの教員もいるかもしれない。また、教員にしても、彼らのことがまだわからないので、距離を取って静観しているということもあるかもしれない。いずれにせよ、教員の側から、特段に心配されることはなく、「はじめは大変かもしれないが、なれてくれば大丈夫でしょう」と思われてしまい、気かけられることが少ないのではないだろうか。

もっとも彼ら自身、自立心が強いと、うまくいかないことがあったときにも自責的になりがちである。そのため、彼らの内面の傷つきは、より一層、周囲に気づかれにくくなると考えられる。

(3) 高専出身学生ならではの特徵

高専出身学生は、「大学教員は敷居が高い存在」と感じているようであった。これには、「高専文化」とでも言うような独特の学校文化と、その中で人間関係が大きく影響しているように思われる。

高専では、中学卒業後の15歳から20歳過ぎまでの5年間以上を、専門ごとのクラスでずっと一緒に過ごす。高校と大学の両方の文化を併せ持つ雰囲気があり、教員は、中学を卒業したばかりのまだ子供っぽい1年生から、5年後には優れた技術者として就職していくまでの成長過程を、親身に見守り続け、大学教員というよりは高校の教員の動きや眼差しに近いようである。

1学年5～6クラス程度で、規模もさほど大きくないため、学生の名前と顔は、学年や専門に関わる教員なら、全て把握している。研究室に配属されてからも、どの研究室も開放的で自由に出入りできる。寮生活を送っている学生も多く、文字通り一日中、高専内で生活している者もいて、教員は親代わりの、日常的な話し相手・相談相手となっているとのことである。このように、教員と学生の距離感が近いことが、高専文化の大きな特徴だそうである。

そのような緊密な関係性の中で育ってきた高専出身学生にとっては、たとえどんなにフランクな教員であっても、大学教員は敷居が高く感じられ、気軽に話しかけたり相談したりしにくいのは当然と思われる。

また、保護者にとっても大学は敷居が高いのかもしれない。高専関係者の話では、高専生には、親や親戚に高専出身者がいる場合が多いそうである。中には、保護者も高専を経て大学に進学したという者もいるが、高専卒業後はすみやかに手堅く就職してほしいと願って、我が子を就職率の良い高専に入れた、という家庭が大半だそうである。そのような保護者にとっては、大学や大学院の研究室や指導教員がどのようなものなのか想像が

つかず、我が子の様子が気になったとしても、どこの誰に尋ねたらいいかすらもわからないであろう。高専出身学生が親に気兼ねしているだけでなく、保護者から大学へのコンタクトが無いことが、保護者へのコンサルテーションが皆無だったことの一因かもしれないと考える。

さらには、友人関係に関しても高専文化の影響が考えられる。高専生は圧倒的に男子が多く、興味関心の領域や生活圏が限定的な、いわゆるオタク的なタイプの学生が少なくない。基本的にはマイペースで、趣味の合う者同士が内輪ネタで盛り上がる文化があるが、性格が違って、長年一緒にいる間に、「アイツはああいう奴」と互いを容認して、平和的に共存しているようである。

そのような高専出身学生が、学部に編入したり、内部生の割合が多い研究室に入ったりすると、既に出来上がっているグループへは声すらかけにくいであろうことは想像に難くない。カウンセリング来談時の抑うつ的な姿は、孤独な努力に疲れ、寄る辺ないさみしさやこんなはずじゃなかったのに、という後悔等も反映されているのかもしれない。ただしA大学に於いては、内部生もコミュニケーションが不得手で、他校出身学生を気遣って、積極的に関わろうとするタイプが少ないというA大学側の問題もある。

高専の中には、毎年、大学への進学に力を入れている学校もあり、高専出身学生同士や先輩たちとSNS等をつながっていたり、様々な情報を得ていたりする者もいる。ただし、不適応に陥ってしまうと、「他の人はちゃんとやれているのに、自分だけうまくいかない・・・」と、かえってプレッシャーを感じる場合もあるようだ。

では、高専出身学生が対人関係構築やコミュニケーションが苦手かと言うと、決してそうではない。表2や事例で見てきたように、高専出身学生の相談では中断は1件もなく、9人中7人が、断続的であっても中・長期に渡り、カウンセリングが継続していた。

彼らから受ける印象は、初回時の主訴の内容はさておき、語り口や態度には、「性急さ」はさほど強くない。筆者らの印象としては、高専出身学生の全般的な対人関係・コミュニケーション能力は、他校出身学生のみならず、内部生も含めたA大学全体の学生たちと比べても、かなり良好であると感じる。

来談の目的がやや曖昧で、話し相手を求める甘えや対人指向性も、べたつとした不快な印象ではなく、むしろ「素直さ」や「人恋しさ」というような感じである。

また、事例に記述したように、一旦終了した後に、相談と言うより近況報告をしに再来したり、卒業前後に挨拶の電話をかけてきたりする等、「人懐こさ」や「律義さ」ということばで表されるような印象も受けるのである。

これらの対人関係上の特性は、高専文化の中で育ってきたからこそのものではないだろうか。そのような彼らが、大学でも下校してもひとりぼっちのさみしさを和らげようと、心安らげる他者を求めて来談するのは、ごく自然なことかもしれない。

2. 高専出身学生に対する支援

(1) 高専出身学生の特性を踏まえた相談支援

高専出身学生の持つ対人関係上の特性は、カウンセラーとの信頼関係構築をスムーズにし、カウンセリングを継続的・安定的なものにすると考える。

一般的に相談が継続することにより、カウンセラーとの間で様々な対話ができ、内省・洞察が深まる。さらにはカウンセリングを通じた振り返りによって、指導教員や研究室メンバーとの関係を徐々に調整していき、適応改善に寄与すると考えられる。

何より、高専出身学生の不適応は、能力不足やミスマッチに因るのではなく、新参者として既存のコミュニティに参入するにあたり、十分なサポート体制が無い中で、自力で頑張るしかない状況に因るところが大きい。特に教員との距離が近く、居心地の良い高専文化の中で育った彼らにとっては、大学に入って感じる孤立無援感は相当なものであろう。さらに、中学以降の5年以上を、高専の中で過ごすことで、“井の中の蛙”になっており、大学と言う“大海”で、初めて挫折感や劣等感を味わう者もいるであろう。来談当初は、孤独な努力に疲れ、寄る辺ないさみしさ、自信喪失から、抑うつ症状を呈している。が、カウンセラーの受容的・保護的な関わりによって癒されると、本来の素直で人懐こい特性が表れてくると言えよう。

大学の学生相談カウンセラーとしては、大学教職員でありつつも、高専の教員や保健室、ひいては実家の親のような、気軽に訪ねられて安心していられる場、時には甘えや弱音を受けとめてもらえる場を提供することが、まずは大事な役割であると考えられる。

(2) 高専出身学生の適応を促進する大学としての支援

学生相談カウンセラーによるカウンセリングは、個別的な支援であり、二次予防・三次予防に相当するものである。不適応に陥らないようにする一次予防、もしくは高専を含めた他校出身学生が、新たな大学生活を円滑にスタートさせられるよう、適応促進的な支援を、大学として検討していく必要があるであろう。

A 大学には、教務課が行う新入生ガイダンスに加えて、個別に履修手続きのイロハを指南したり履修計画を立てるのを手伝ったりする、『学修コンシェルジュ』という相談窓口が設置されている。

窓口開設当初は学部の1年生のみを対象にしていたが、他校出身の大学院新入生からの問い合わせが少なくないことから、大学院修士課程1年生向けの相談会(実質的には、他校出身学生向け)を開催するようになった(学生支援センター・修学支援部門, 2018)。

布柴・吉武(2011)は、他校出身学生の多い理系大学院の学生支援担当教員として、学生相談室やピアサポーターと協働して、大学院新入生を対象に、初期適応のためのワークショップを実施しその効果を検証している。入学式翌日の教務ガイダンスの後に実施。研究分野やキャンパス、出身校の違いを超えて、大学院新入生を

グループ分け。同期生間での友人関係を築くこと、新しい生活の不安を軽減すること、困った時に相談できる相手がいることを知ってもらうことを目的に、グループ対抗で最適解を考えるゲームに取り組んでもらう。その結果、参加した大学院新入生の不安が軽減したのみならず、ピアサポーターとして協力した先輩学生たちへも教育効果があったことを報告している。

両例ともに、高専出身学生のみで特化した支援ではないが、非専門家の教員が、個人的な厚意ではなく、大学・部局の組織的取り組みとしての支援を提供していることが意味深い。

加えて、前者では、少数派の他校出身学生の困っている声に気づき、そのニーズをキャッチして、それに応えるサポートを形にしている。また後者では、他校出身学生の不安軽減のカギは、友人・居場所を作ることであるとして、実際に、同期と楽しく交流する体験を提供している。

大学生・大学院生ともなれば、何事も自主的自発的に行うことが是という考え方もあろうが、少しだけ親切に、教職員の方から手を差し伸べ、“手立て”や“人”へつなぐ機会を設けることによって、不適応に陥ることを回避できるのではないだろうか。

おわりに

これまで予備的研究として、自験例の基礎的データをもとに、高専・他大学出身学生の適応状況・相談の実態を探索してきた。

今後の本研究では、広く学生相談担当者を対象に質問紙調査を実施して、各大学における他校出身学生の適応状況に関するデータを積み上げること、またカウンセリングに来談した学生だけでなく、新しい環境に適応している他校出身学生を対象とした聴き取り調査等により、彼らの適応支援に関するニーズを把握していく予定である。

今回の予備的研究が契機となり、数人の高専関係者と知り合い、いくつかの高専や高専生を積極的に受け入れている大学を訪問させていただき、高専や高専文化についての興味深い話をたくさん聴かせていただいた。その内容は、いずれ稿をあらためてまとめたと考えている。

【付記】

本稿は、日本学生相談学会推進研究助成金を得て、尾崎・相澤が実施している、『他大学・高等専門学校からの編入学生・大学院進学者の適応支援に関する研究』の予備的研究の一つであり、日本学生相談学会第35回大会の口頭発表(相澤・尾崎, 2017b)をもとにまとめたものである。

学会の場で示唆に富むコメントをくださった座長の京都大学 高橋靖恵先生をはじめ、高専文化や各校の状況をご教示くださったフロア参加者、そして業者らの

訪問を快諾して貴重な情報提供をしてくださった高専・大学の先生方に、深く感謝申し上げます。

【文献】

相澤直子・尾崎啓子（2017a）他大学・高等専門学校出身学生の適応に関する予備的考察—学生相談事例の分析から— 埼玉大学教育学部附属教育実践総合センター紀要 第16号, 81-88

相澤直子・尾崎啓子（2017b）高等専門学校出身学生の適応に関する予備的研究—高等専門学校出身学生の事例に焦点をあてて— 日本学生相談学会第35回大会発表論文集 p54

学生支援センター修学支援部門（2018）学修コンシェルジュによるガイダンス—A大学大学院課程新入生向け— A大学内部資料

*匿名性を保つために、大学名はA大学のままとした

布柴達夫・吉武清實（2011）教員による予防的學生支援の試み 学生相談研究 vol132-No2, 131-143